

論文の和文要旨	
論文題目	日本における天竺認識の歴史的考察
氏名	石崎貴比古

本論文は日本における天竺認識を歴史的に考察するものである。天竺という概念は6世紀に仏教という外来宗教が伝来するのと同時に、その教えの誕生地として知られるようになった。以来仏教者だけでなく広く用いられる言葉となり、中世には「三国世界観」と称されるように、人々は世界を本朝（日本）、震旦（中国）そして天竺という三国によって構成されるものとして認識するようになった。三国世界観は近世に入り、西洋由来の近代的地理情報の流入によって瓦解し、今日の五大陸認識にも続く五大州という新たな枠組みによって世界が認識されるようになっていく。そのような変化に伴って天竺という語もまた一般的には使用されなくなっていくが、「インドの古称」として今日もなお知られている。

本研究が前提として疑問視しているのは天竺という語が本当にインドの旧称なのかという点である。例えば現在のタイに相当するシャムが天竺と称されていたことが知られているように、インドと天竺は無条件に等号で結ばれるものではないと思われる。天竺がインドの旧称として機能するようになった転換点を明らかにすることは日本列島に住まう人々の異国、あるいは世界に対する認識の変化を論じることにも繋がるものと考えられる。

第1章では先行研究について概観し、本論文の研究史上の位置づけを確認した上で、本研究が有する意義について論じる。本論文の先行研究は第一にインド学、南アジア学の分野における日印関係史研究、第二に日本史、わけても対外関係史研究という二つの分野において行われ、さらには両者の範疇には入らないものの、本研究について先行研究として位置づけるべきものが存在する。これらを分類することでそれぞれの長所と短所を整理することが出来る。天竺認識に関する先行する研究は様々な分野にわたって断片的に行われてきたと言える。しかしながら天竺という存在や、それに対する日本人の認識については一つの論題として包括的な研究が必要とされる問題だと考える。天竺に対する認識は単独で醸成されたわけではなく、巨大な隣国である中国に対する認識と、自国である本朝に対する認識と連動して変遷してきたのである。こうした意味で天竺認識の変遷を考察することは日本人の自国認識についての議論を深める意味でも、意義があるものと考えられる。

第2章では6世紀の仏教公伝から16世紀までの間に天竺という語が歴史上どのような史料にどのような形で見出せるのかについて概観した。天竺認識に関する専論は希少であり、天竺という語が史料上どのような形で現れるのかについて通史的に述べたものは稀である。天竺という語の由来は未だ明らかではないが、インダス河流域を意味する「Sindhu」が転じたもので、印度、身毒、天篤といった異称と同根である。僧侶たちは古代以来仏教の祖国

に対する呼称として天竺と印度を同じ意味を持つものとして併用していたが、仏教者以外の人々の間では天竺という語のみが仏教の祖国を指し示す語として支配的になる。天竺は仏教が滅びたことで仏教の聖地としての地位を失ったはずだが、想像上の国として人々の意識の中で存続し続けたため、そのイメージはより宗教的、幻想的、非科学的な色彩を帯びるようになっていった。地理学的な名称であった印度から、宗教的、幻想的、非科学的な色彩によって日本独自の天竺へと変化した様子を筆者は「印度の天竺化」と表現した。

第3章では天竺認識の大きな転換点の一つとしてザビエルを代表とするイエズス会宣教師の来日について取り上げた。「天竺人」と呼ばれたイエズス会宣教師の来日は16世紀の半ばに菩提僊那以来初めてであっただろうと言い得る直接的な交渉だった。彼らが天竺人と呼ばれたことは前近代的な無知や情報の未成熟として論じられてきたが、このことは天竺や仏教、異国に対する日本人の認識に関する大きな問題を内包している。宣教師たちは自分たちが天竺人と呼ばれている自覚は持っていた。彼らは仏教という宗教がインドやネパールに誕生し、中国、朝鮮半島を経由して日本にもたらされたという歴史的事実や、南アジアから中国、東南アジアまで含んだ広い地域で信仰されていることを理解していなかった。また同様に宣教師たちは彼らがアジアにおける布教活動の拠点としているゴアが、仏教の誕生地とそれほど離れてはいなかったことについても認識していなかった。一方、宣教師たちは天竺人と称されたがゆえに、キリスト教は仏教の一派とみなされた。今日我々は仏教が広義のインド由来の宗教であるものとして理解しているが、当時の人々が理解していたのは仏教が「天竺由来」であることであり、それゆえ情報の錯綜が見られた。

第4章では近世における天竺という概念の地理的な変遷について世界図を史料として検討した。世界地図上に現れる天竺の表現を詳しく検討すると、天竺という古い名称がインドという新しい名称に変化していったのではなく、天竺という古来日本人に親しまれていた概念が、西洋由来の地図上に落としこまれ、次第にインド亜大陸が天竺へと同定されていくことが確認できる。ヨーロッパ由来の地図はアルファベットによって記され、天竺という言葉は当然ながら一切存在していなかった。しかしヨーロッパ製世界地図を元に記された最古の日本製世界地図と考えられる「山本氏図」においては天竺が記載されている。あらゆる地名を漢字によって記した『坤輿万国全図』では天竺の文字は非常に小さく記載され、インド亜大陸には「應帝亞」という新たな名称が記されていた。『坤輿万国全図』を直接参照した「万国総図」がインド亜大陸に対して「インヂア」との呼称を用いている一方、それをさらに通俗化した「万国総界図」においては「坤輿万国全図」でごく小さな記載であった「小天竺」との呼称を拡大して「インヂア」として代わる名称として用いている。

第5章では江戸時代の知識人が天竺に関してどのような認識を持っていたかを考えるために西川如見と寺島良安の著作を題材にした。西川如見の『増補華夷通商考』は江戸時代初期に長崎に流布していた海外情報を元にしたと考えられる「異国風土記」を種本とした『華夷通商考』をイエズス会宣教師ジュリオ・アレーニの『職方外紀』によって増補したものである。各国の説明を見るとその国が天竺に含まれるのか否か、天竺であるとすれば東西南北

いずれの天竺なのかなどということが情報として盛り込まれ、天竺という語が異国を説明する際のキーワードとしても機能していたことが分かった。『和漢三才図会』の「異国人物」「外夷人物」の部分は『三才図会』の当該部分と同様に様々な国々を列記する方式を取っている。双方の人物図を見て気づかされるのは、いずれの国の住民も衣服や頭髪、髭などの表現方法が極めて「中国的」に描かれていることである。日本人は実際に到達出来ない天竺を想像して描く際に中国をその素材としていたものと考えられるのである。

第6章では天竺徳兵衛と『五天竺』、そして「大象図」を例に民衆の天竺認識について論じた。朱印船貿易は天竺との貿易だったと言える。当時の天竺は未だインドに同定されておらず、実際に人々が最も天竺らしいと感じた場所、すなわち暹羅が「中天竺」としてよく知られた存在となった。『天竺物語』は実在の天竺徳兵衛の渡航記録をもとにした物語であるが、『天竺徳兵衛聞書往来』『天竺徳兵衛郷鏡』『天竺徳兵衛韓嘶』と時代が下るに連れて史実の度合いは薄まり、キリシタンや謀反人といった本来天竺には無関係と思われる要素が付随していくことになった。一方『五天竺』に見たように朱印船貿易の記憶とは全く異なる文脈、すなわち『西遊記』という中国由来の物語を通じて醸成された天竺観もまた存在した。また、天竺は到達できない宗教的な異国であるがゆえにゾウのような珍奇な文物が存在する場所としても想起されていた。

7章では国学者・平田篤胤の『印度藏志』を例に宗教的観点から見た天竺像の変化について論じた。平田篤胤は富永仲基の大乘非仏説を踏まえ『出定笑語』などの著作で痛烈な仏教批判を行ったことで知られるが『印度藏志』はその集大成として位置づけられる。『印度藏志』は玄奘の『大唐西域記』を始めとした膨大な仏典をテキストとして、蘭学に由来する当時としては最新の地理学的知識に基づいてこれを批判しながらインドについて論じたものである。仏教を旨説とする篤胤にとってはその聖地として中世以来様々な宗教的脚色が加えられた天竺像を近代地理学に基づいて批判し、五大州の亜細亞内に一国として位置づけることが本朝と称するところの日本という国家の自画像を描くことに繋がっていたものと考えられる。篤胤の国学はいわゆる「アジア主義」との思想的連続性が指摘され得るが、近代国家としてのインドが日本と同じアジアの同胞と看做されるためには、三国世界観が克服される必要があったものと考えられる。つまり天竺という概念が消滅し、インドという新たな概念が人々に共有されることによってアジア主義もまた現実的なものとなったと考えることも出来るだろう。

本論文が結論として述べるのは以下のことである。第一に天竺は単なるインドの旧称というわけではなく、その認識や指し示す内容は仏教公伝時から現在に至るまで様々な形で変化してきた。第二に天竺という概念はいわゆる三国世界観の一翼として日本人の世界認識の上でこれまで論じられてきたよりも大きな役割を演じてきた可能性がある。そのため、天竺認識の変遷を研究することは日本における自国認識について考察することにも繋がるものだと考える。第三に天竺あるいはインドという語や概念について歴史的に検討する際に重要なのはそれが「いつの、誰にとっての天竺／インドであるか」という点である。